

<新刊紹介>萩原一雄著「村長通信」

著者	岸本 一行
雑誌名	日本文学誌要
巻	50
ページ	192-192
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019781

萩原一雄著

「村長通信」

岸 本 一 行

「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。」と「草枕」にあるが、人の世の中でも学校は、特に住みにくいと考えられているのではなからうか。因に高等学校の一年間の退学者は十万人を越すというのが現状である。

ところが住み易い高等学校が出現したのである。それが萩原一雄校長が指導・活躍している埼玉県私立東野高等学校である。この学校は、校歌・校旗・校則のない学校、そして「楽しく、わかる授業」をモットーとして、生徒の個性を尊重し、生徒並びに教員の自律・自立を重んじ、日本国憲法と教育基本法の精神を建学の理念として、実績をあげているのである。崇高な理念や理想をかかげる

ことは易しい。しかし、その理念や理想を実現することは難しい。

我が国では、政治の世界だけではなく、教育の世界にも、建前と本音があり、さらに、価値観が多様化している現状では、教育問題・学校問題を評論するとなると、一億の人がすべて評論家になることができ、一億通りの答が出るのではなからうか。そうした状況の中であって、単なる評論ではなく、万人に、これこそ理想の学校の姿であるという実践となると、言うは易く行うは極めて難しいことである。その困難を克服して、地域社会に開かれた理想の学校をめざして、現実に実績を築いている東野高等学校の姿と同校校長の心の記録は、教育に関係のある者もない者も、この本を一読して新しい世界に心を打たれることであろう。

この著書の学校の部分の紹介が長くなったが、この本の大部分はこのようなユニークな学校を創造し、発展させ、その原動力となっている萩原一雄校長の私的記録が、量的にも、質的にも、大部分を占めている。この村長通信の一話・一話は、まことに自然体で自らを淡々と語っているなかに、前記のような学校が実現し、すばらしい実績を築いている

のも、むべなるかなとかならずかれる記録である。

教師は「教育」を忘れるべきだと説き、教育図書や教材研究や指導法の研究をするより、小説を読め、すぐれた演劇や芸術を鑑賞し、読書・スポーツを楽しめと説く校長にして、この学校ありと納得がいく。教員どうしは勿論、生徒の前で、教師を「先生」ではなくて「さん」づけで呼び、能に親しみ、また酒を愛する人間萩原校長の赤裸裸な姿が、何のてらいもなく語られている。その巾の広さと興行の深さは教育に関係のある人にもない人にも、深い感銘を与えずにはおかない。

この本を読んだ人は、例えば人生観や価値観を異にする人でも、この理想に燃え、その理想を実現し、更に向上発展の道を歩んでいるこの本の著者、萩原一雄校長の、これからの一層の精進・活躍を願うと共に、このユニークな学校の発展を祈り、この学校の卒業生の生き方を注目することであろう。

(きしもと かずゆき・一九五五年大学院修士課程修了)

▽一九九四・三 教育史料出版会刊 B 6

二八六頁 一七五一円

▽著者Ⅱ一九六二年博士課程修了